

平成 27 年度 授業評価・授業研究報告

FD シンポジウム

石井 浩一（保健体育講座）

日時 2015 年 12 月 10 日(木)12:50-14:10
場所 教育学部本館 2 階会議室
司会 東 賢司
話題提供 池野修、山崎哲司、小田哲志

【授業改善シンポジウム概要】

「教育実践演習」についての理解を深めるとともに、「教職実践演習」を通してみえてくる愛媛大学の教員養成カリキュラムの課題について考察し、個々の授業とのつながりを考える。

【話題提供 1】

池野 修氏（英語教育講座、教職コーディネーター）

「教職実践演習」は 2010（平成 22）年度入学生から新設された「教職に関する科目」の必修単位（2 単位）であり、大学が自らの養成する教員像や到達目標等（愛媛大学教職課程の DP に照らして最終的に確認する一すなわち力がついたかどうかを確認する授業である、と前置きしたうえで、教職課程学習ポートフォリオ（教職ポートフォリオ）＝愛媛大学版「履修カルテ」の作成（全国の大学でやることになっている）一すなわちどのような教職の学びをしているのか？を確認するものが基本となることを説明された。

教科専門の筆者にとっては、ポートフォリオ、リフレクション・ログ（省察記録：教育観、教職 DP 自己評価、学習計画）、ラーニング・ログ（学習記録：教職科目の記録、教科科目の記録）、プラクティス・ログ（実践記録：実習の記録、実践活動の記録、介護等体研の記録）等、聞いたことはあったが、具体的にどういうものなのかは今ひとつピンとこなかったが、池野氏の説明で理解できた。

次に、平成 21 年度入学生から全学で必修となっているリフレクション・デイ一すなわちこれまでの教職に関する学びの振り返り＋これからの計画一について説明があった。リフレクション・デイは、現在の教育観の記述、実践講話とグループ・ディスカッション、教職 DP の達成度、自己評価、今後の学習計画・学習目標の立案によって構成されることが理

解できた。

では具体的に「教職実践演習」の授業内容はどうするのか。この点について池野氏は、

1. 愛媛大学教職課程 DP①～⑤に対応したものであり、その達成状況が評価できる内容とする。
2. 事例研究や模擬授業等も取り入れる。
役割演技（ロール・プレーイング）、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業等も積極的に取り入れることが望ましい（課程認定委員会決定）
3. 教育委員会指導主事等による講話も含んだ内容とする。

「学校現場の視点を取り入れる観点から、必要に応じて、現職の教員または教員勤務経験者を講師とした授業を含めること（課程認定委員会決定）

教科専門の筆者にとっては、これまで教職に関する科目を担当したことがなく、あまり馴染みがなかったが、来年度から教員養成に特化した新たな体制で始まるからには知っておかなければならないことが多く、今後の授業内容を考える上でも、大変参考になった。

続けて、授業の実践例について説明があった。大きく分けて、教職系教員による担当、外部講師＋教職系教員＋教職コーディネーターによる担当、教科（教育）系教員による担当の実践例について説明された。特に、教科（教育）系教員（英語）が担当した第 11～14 回の模擬授業について、「今までの模擬授業は、授業実践力をつけるのが目的であったが、「教職実践演習」における模擬授業は、授業実践力がついていようかどうかを判断することが目的」という話が「教職実践演習」を象徴するもの、と受け止めた。また、各テーマ、内容、そして①～⑤の、どの DP に対応しているのかが説明された。登壇者の組み合わせ、内容の調整等苦心された様子がうかがえた。模擬授業およびレポートの評価基準と評価方法は DP①～⑤のそれぞれに詳細な評価基準が設定されており、それをどの方法によって評価を出すのかが示されていて、勉強になった。

【話題提供 2】

山崎哲司氏（理科教育講座、教職総合センター長）

山崎氏からは、「他大学の状況と教職実践演習の意義」と題する話があった。「教職実践演習」の実施初年度頃、日本教育大学協会の集会等では、さまざまな議論が交わされ、大学の教員では「教員としての適性」を判断できないなどの理由から、特任の教員等で実施している大学があったり、新任の教員が直面する課題のノウハウを主に教える大学があったり、「教職実践演習」という授業が教育学部の教育課程において、どう位置づけるのか試行錯誤していた様子をうかがい知ることができた。

結果、先の池野氏の話にあった通り、「教職実践演習は、当該演習を履修する者の教科に関する科目および教職に関する科目（教職実践演習を除く。）の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとする」と位置づけられた。授業例としては、宇都宮大学や東京学芸大学を挙げたが、授業内容は多種多様であることを述べた上で、よくみられる「教職実践演習」の内容は、18年答申の「授業内容例」（①ロールプレイや事例研究のほか、現職教員との意見交換を通じて、教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務等を理解しているか確認する。②学校において、子どもと直接関わり合う活動の体験を通じて、子ども理解の重要性や、教員が担う責任の重さを理解しているか確認する。等々。

これら授業内容例から対応しやすいものを選び、それを柱とすること。評価については、18年答申の「教職実践演習」に含むことが適当である、とする4つの事項を評価項目とすること。この見解は参考になる。

愛媛大学における特徴としては以下の3つの事柄を挙げられた。

1) リフレクション・デイの実施

「学びの軌跡（の集大成）」を一つの科目だけとするのは困難

2) 到達目標を教職課程のDPとし、各回の評価もDPにより行う（養成する教員像や到達目標等に照らして最終確認をしていく）

3) 補修学習・補充学習

可能な範囲で評価の回数と観点を揃え、最終確認をする

【話題提供 3】

小田哲志氏（学校教育講座）

公立中学校校長経験者の小田氏からは「教職実践演習からみた学生の姿」と題して、学校現場経験者ならではの話をいただいた。やはりこの授業内容は、現場経験者でないと不可能だと思った。例えば、「課題：年度最初の参観日。どういうクラスにしたいか初心表明スピーチ」とか「学校裏サイト、いじめ問題などの学校教育に関する課題を取り上げ、グループで「指導の具体案・授業案」を意見交換する」など。

次に、成果と課題（学校教育講座教員限定）は参考になるところが多かった。例えば、成果としては以下のことである。

- 1) 意欲のある学生には本時が最終的な実践力育成として機能し、意欲化が図られている。
- 2) 小集団で議論することで様々な考え方を共有できる。外部講師による講演により、学校教育の今日的課題の理解を最低限担保している。

課題としては以下のことである。

- 1) 事例が一つで、その内容が複雑
- 2) レポート課題が多く、細やかなフィードバックができない
- 3) 教員になりたい学生とならない学生が含まれている班では意欲に差があり、活動が中途半端になり、意欲の低下につながる
- 4) 文科省からの依頼によりやっているという印象が強い

次に、「教職実践演習」のみならず、愛媛大学の学生教育に当たっての提言といってもよいことを話されていたのが印象的だった。愛媛大学の学生の強みと弱みを的確にとらえられている、と思わざるを得なかった。また現在、愛媛教育の中核を愛媛大学同窓生が担っている状況から、愛媛大学の教育の方向性は誤っていない、という話は、ほっと胸をなでおろすような安心感を覚えたし、自信を持っていたいいんだ、という気持ちの確認もできた。

最後に、本シンポジウムの感想を述べたい。シンポジウムと銘打つからには、3人が話した後に、司会者からの投げかけあるいはフロアからの投げかけに対して、それぞれのシンポジストの絡みがあってほしかった。一人一人がそれぞれ話して終わってしまったので、ちょっと残念だった気がする。